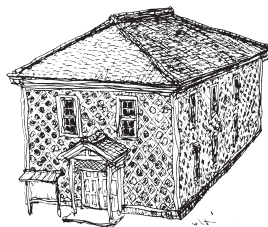


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、デイベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●慶應義塾図書館長

すだしんいち
須田伸一

変わる図書館、変わらない図書館

慶應義塾大学の図書館は、建物名に「図書館」という呼び名は残っていますが、1970年には「情報センター」、1993年からは「メディアセンター」という名称になりました。この名称の変遷は、図書館に求められる機能の変化に応じて組織の名前を変えてきたものと言えます。呼び名が変わっても、学術情報の提供を通じた教育・研究・医療の支援という使命に変わりはありませんが、図書館そのものの様相はかつてと比べて大きく変わってきています。顕著な変化としてまず挙げられるのが、サービスのオンライン化が進んだことです。デジタル技術の発展に伴い図書館資料の電子化が進み、リモートアクセスというネットワーク技術により自宅からでも電子資料を利用できるようにになりました。貸出図書の特延延長などの手続きや各種の申し込みもオンラインでできるようになり、図書館に来なくても受けられるサービスが格段に増えています。

では「館」としての図書館がもう不要になっていくのかという決断でそうではなく、むしろ図書館や図書館職員が果たす

べき役割はより重要になってきています。例えば、インターネット経由で手軽に情報が得られるようになった分、価値ある情報に正しくたどり着くための利用者一人一人の情報リテラシーを高める取り組みがより一層求められています。資料についても、蔵書すべてが電子化されている訳ではなく、古い資料や日本語の資料などは今でも紙媒体での利用が主流で、図書館に足を運ぶことはまだまだ必要です。三田メディアセンターでは2014年から「貴重書活用授業」という、普段は鍵のかかる書庫で厳重に管理している貴重書の実物を、学部の特延の中で学生が目当てにする機会を提供する取り組みを始め、リアルな資料による教育的効果の高さを実感しています。

コロナ禍が落ち着きキャンパスのにぎわいが戻ってきたのに伴って、減っていた図書館の利用者数も戻りつつあります。図書館には変わっていかねばならないものと変わってはいけないものがある、そのことを念頭に、メディアセンターは常によりよい図書館を目指していききたいと思っています。